平成 26 年度大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26Ｊ03	氏　名	鈴木　敏成
研究主題 ―副主題―	若手教員の育成における指導教諭の役割について ―特別支援学校における授業づくりへの支援に焦点を当てて―		
所属校	都立七生特別支援学校	派遣先	早稲田大学大学院

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	（目的） 特別支援学校の若手教員が授業づくりの力を高めていくために、新しい職層である指導教諭は、どのように関わればよいかを明らかにし、今後の指導教諭制度の拡大に寄与する。 （問題の所在） 特別支援学校では、毎年多くの若手教員が採用されるが、特別支援学校の教員免許を所有していない若手教員も多い。そのため、学校現場では、校内で OJT により若手教員が特別支援教育の専門性を身に付けられるようにすることが喫緊の課題となっている。若手教員育成を充実させるには、育成を担える専門性の高い教員の存在が大切である。新しい職として設置された指導教諭は、いわゆる「先生の先生」として授業づくりを牽引する役割を期待される職種であり、若手教員の育成の育成においても多くの役割を期待される。 そこで、本研究では、新しい職種として配置が進みつつある指導教諭は若手教員の育成を担う教員としてどのようにあるべきかを、特別支援学校における若手教員の授業づくりについてのニーズや指導教諭による若手教員育成の事例から考察した。
Ⅱ　研究の方法	初任者への授業づくりアンケートと、指導教諭と若手教員へのインタビュー調査を基に、若手教員育成における指導教諭の役割を明確にした。初任者への授業づくりアンケート調査は、集合調査法により実施した。95 名へアンケート用紙を配布し、94 名から回答を得た。アンケート調査は、指導教諭４名と若手教員５名に対して本構造化インタビューを実施した。 また、本研究では、これまでに主幹教諭や主任教諭など、新しい職種の配置を先進的に行ってきた東京都の公立学校に焦点を当てた。さらに、以下のように研究の対象を限定した。 ・ 若手教員の支援と限定した。 ・ 特別支援学校に校種を限定した。 ・ 授業づくりへの支援と限定した。
Ⅲ　研究の結果	初任者へのアンケート調査では、特別支援学校の初任者の授業づくりへのニーズを明らかにした。94 名中 93 名の初任者が、授業づくりについて、悩みをもっていると回答した。どのような悩みをもっているかという質問に対しては、児童・生徒の実態に応じた指導在り方や、専門外の教科等の指導、ティームティーチングにおけるサブティーチャーとの連携について、困ったり悩んだりしているとの記述回答が多かった。特別支援教育について大学等で学ぶ機会のなかった初任者も多い現状では、多くの初任者が授業づくりに困惑しており、校内での支援が喫緊の課題であることが明らかになった。 また、授業づくりについての相談をする機会は、比較的多くもてており、相談する相手は、同じ学年や学習グループの教員、若手教員育成研修の指導教員・教科指導員、初任者同士などが多いことが

	明らかになった。 　一方で他の教員の授業を見る機会については、あまりもてていないことが明らかになった。このような現状から、若手教員の育成を支援するためには、他の教員の授業を見る機会をどのように確保していくかが大きな課題であることが明らかになった。 　指導教諭と若手教員へのインタビュー調査の結果は、「指導教諭という立場」、「授業を見せる機会の活用」、「校内支援体制」の三つの視点で分析をした。「指導教諭という立場」については、東京都において指導教諭が初めて配置された平成 25 年度には、主幹教諭や主任教諭との職務の違いが明確になっていない学校が多かったが、配置２年目になり、授業づくりの専門的な立場として位置付けられるようになってきていることが明らかになった。また、職層が明確になっている東京都の特別支援学校においては、指導教諭は授業づくりの専門的な立場の教員として、若手教員が相談しやすい立場になっており、学年や学部を超えて、多くの若手教員が授業づくりの相談をしていることが明らかになった。「授業を見せる機会の活用」については、「模範授業」など指導教諭が実際に行う授業を若手教員があまり参観できていないことが明らかになった。 　一方で、参観の機会をもてたり、ティームティーチングなどで共に授業づくりを行う機会をもてたりした若手教員は、指導教諭の授業から多くのことを学び、その後も学び続けていこうという意欲をもっていることも明らかになった。 　「校内支援体制」については、各学校様々な形で、教員の支援を行っており、指導教諭の関わり方も様々であった。若手教師から信頼されている指導教諭は、学校のシステムによるフォーマルな形での支援だけでなく、個人的な努力により、若手教員の成長を支えていることも明らかになった。また、若手教員の育成を身近な立場として担う中堅教員たちの育成に指導教諭が積極的に関わり、成果を上げていることも明らかになった。
Ⅳ　考察	上記の結果を踏まえて、特別支援学校での若手教員育成における指導教諭の役割を以下のようにまとめた。 ①　若手教員が直面する授業づくりの困難さを、指導教諭という立場を有効に活用して、相談にのったりアドバイスをしたりすることにより克服できるように支援する。 ②　模範授業などの授業を見せる機会を活用して、若手教員が該当障害種別における授業づくりの基礎を身に付けられるようにする。 ③　中堅教員の授業づくりの専門性を高めることで、若手教員が身近な教員から、該当障害種別の授業づくりの基礎を学べるようにする。 ④　自ら希望する若手教員に対しては、ニーズに応じた支援を行い、該当障害種別の授業づくりの専門性を高められるようにする。 ⑤　指導教諭自らが、常に児童・生徒の姿から授業を省察し、同僚教員たちと学び合う姿を見せることで、若手教員が学び続けることの大切さを学べるようにする。 　今後は指導教諭の配置による、若手教員育成の成果の検証等が課題となる。